安貞五年記 女理 全

二

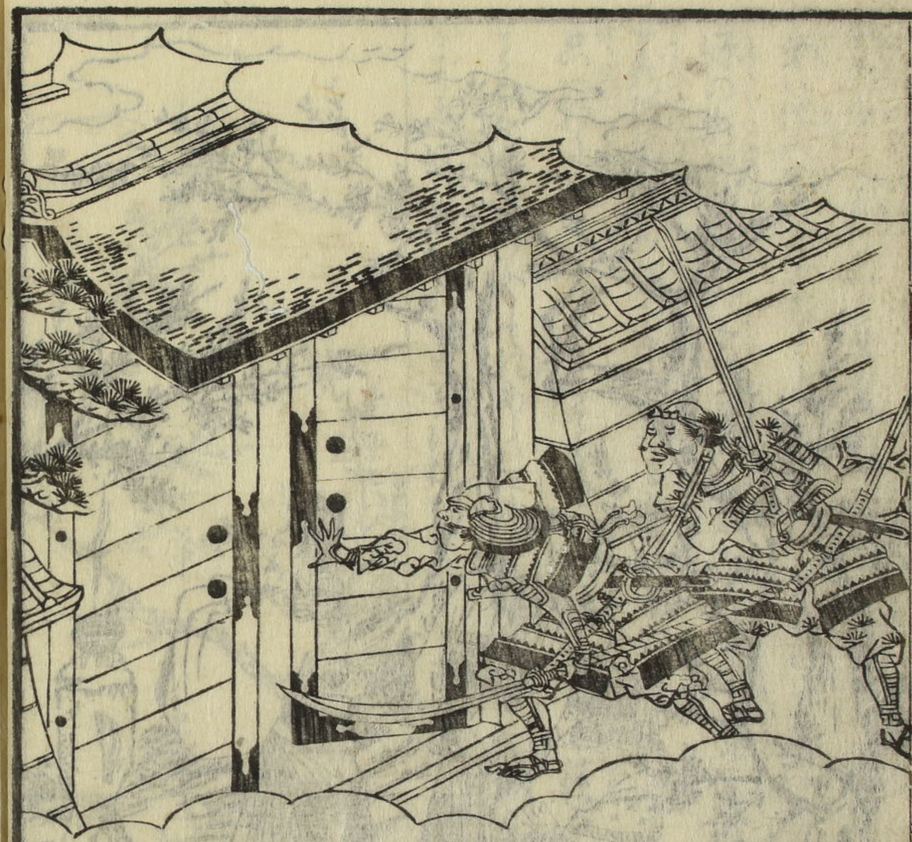
ロ 9
4084
2

門口文庫
號 4084
巻 2

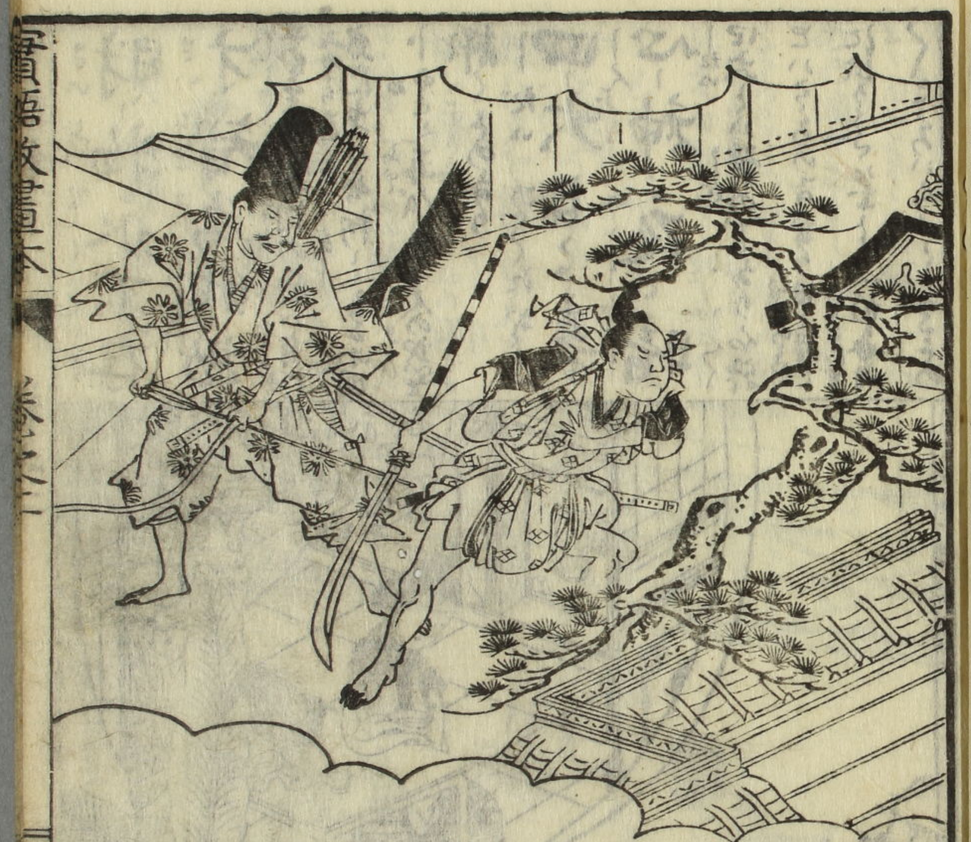
昭和十六年一月十一日寄贈
尼野貴英氏

兄弟不常合
恣悲為兄弟

兄ハ弟をあはれミ弟ハ兄を敬ふ乃道を学ふ時ハ中き続にいるべく兄
弟ハ他人のそゝぎまりくゝあさゆゝきさなりゆくこゝろいくに惜しかれ
源の頼朝ハ世なたぐひなきゆゑ名将なれども弟義経の軍勢を退ひ奢ひ
て義経軍勢も兄を恭敬する実情なりしよりさしも雪武の四海をしたがへ
只一朝に滅亡しるハまことに世の人の惜む所なり故ふ先哲の言ふ
てあり人く恭ふして礼あるハ海の内皆兄弟なりと漢土の玄恵関羽張飛
ごとき姓ハ異なれども義に於てハ死生を共ニ世人を教へ



毛詩に曰く兄弟
牆内に鬩ぐも外其
務を禦ぐ良朋あ
るといへども亦に戒
るべし兄弟は天
倫の中なるゆゑ情
あれば常に不合して
闘諍をなすもこれ
より敵の来る時は
心を合せて防ぎ
さゆるゆゑ親しき
朋友乃およぶべき



ところにあらざるなり
詩の主意なりさ
れば兄弟は仁義孝
弟をもつとなるべし
つまづかるべ
き理なるを
よくよくまた
覚えて
なるべ
し

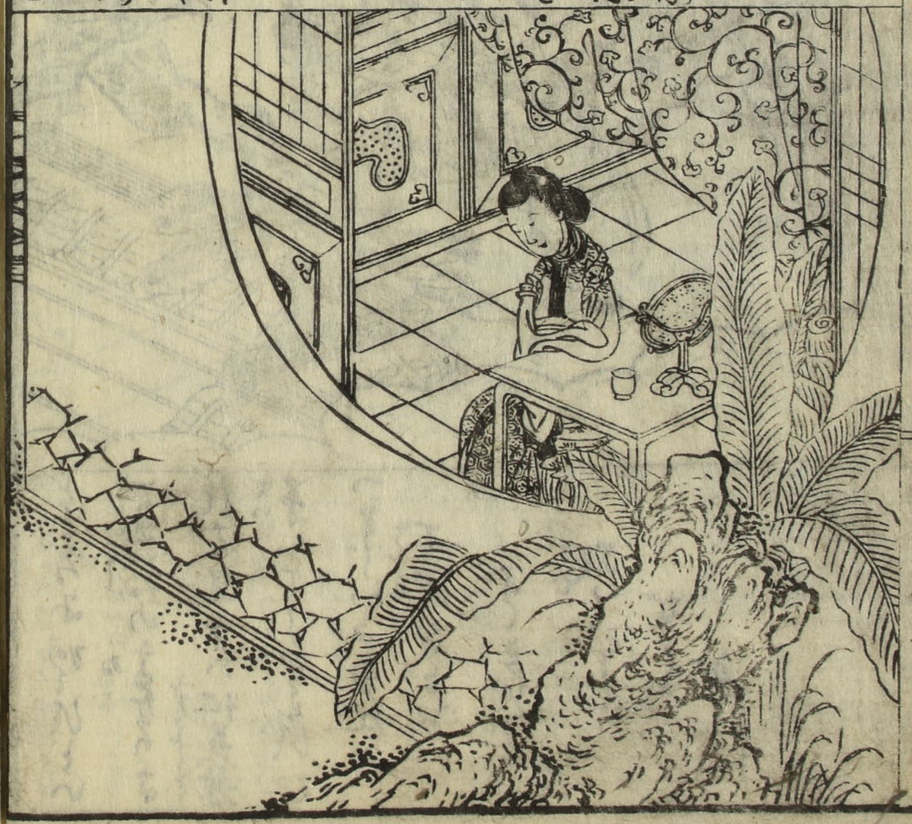
財物永不存
才智為財拙

[illegible]

解くるのうり

四大日こ衰
心神夜こ暗

[illegible]



[illegible]

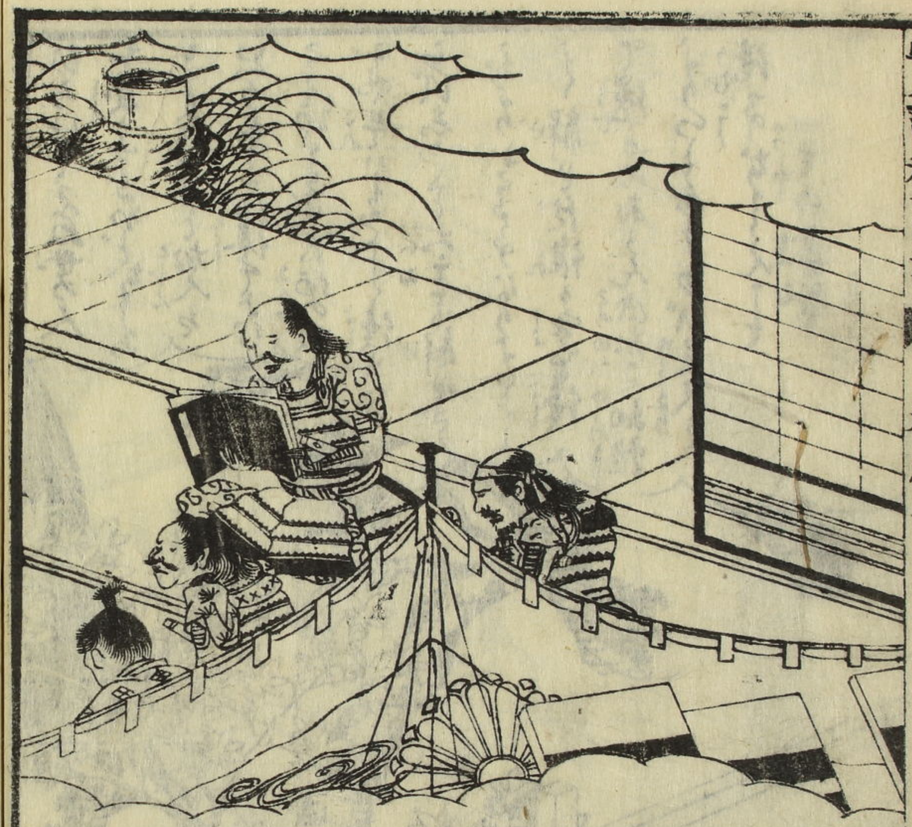
唐の玄宗皇帝とゝせ一帝ハ幸ひ孝ありて
乃明らかに聖人の乃をさまり一四海天子ありて大日くよ裏揚貴
妃とゝふ美女をゆ一ゝ神ゆく暗くありて天下の政を荒さ終に安祿
山しいの叛逆人のゆに世を乱されゆふ兄日くに彩小せさるゆ有ありゆ吾妻の彩
四義貞も世く帝ゆる名ゆなれども勾當の内侍ゆ老にゆ引ひ分のゆひ山一
かゝさるにより終に流れ矢ゆ命と為一西岳とゆ峯の陰ゆ隠ゆ忍ずんゆ有ゆに

幼時一不勤學
老後徒恨悔
尚無有所益

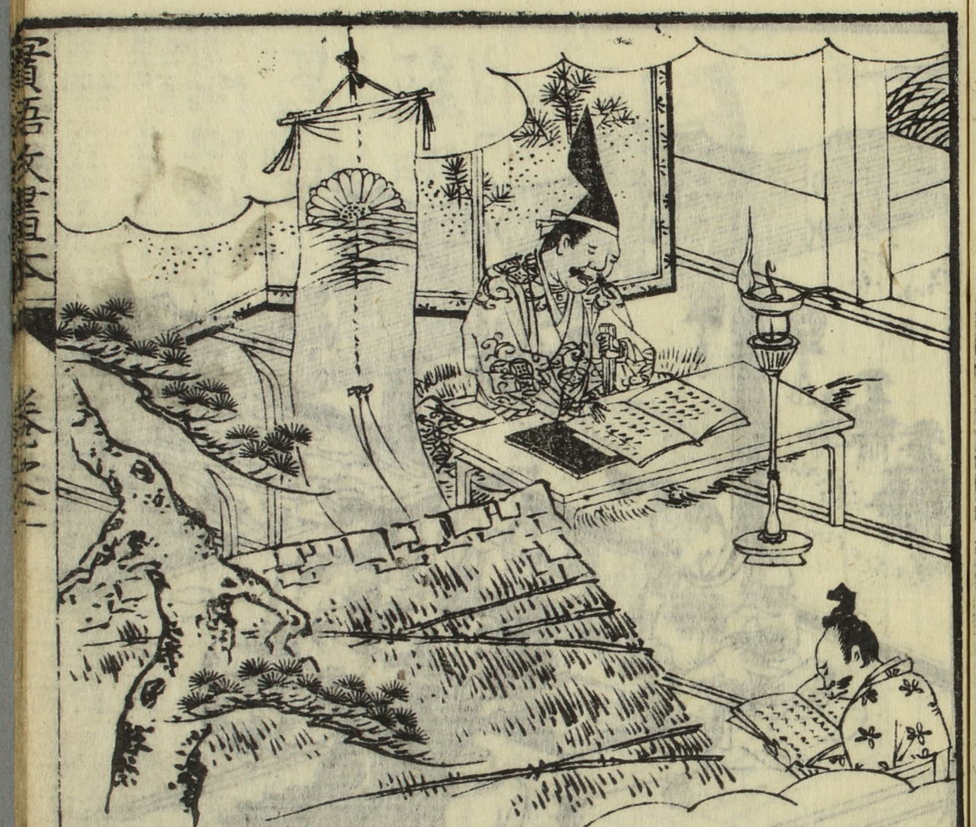
古文勸學の文に曰く勿謂今日不學而有來年日月逝矣歳不我延
勿謂今年不學而有來年日月逝矣是誰之慫又古きふみにあはれとしたけの
呼嗚老矣是誰之慫又古きふみにあはれとしたけの
ふのあぐ揚よる八嵐のふりぬるまゝに勤學とかまくとよ
學問もとるとこに加ぐ〜ぶ伽よるつとあ學ぶるといふこと七八
巻まて手習ふ子加子ち人あ〜ぶ等盤十余巻まてハ古文の沼美帳合の法抽法勘定さ
お〜ゆべ〜女子ハぬいものおりつむぎそ〜ぶ料理煮焚の加減知て叶ぬゆ加ぐくあり
若き附ハ金銀のすに月日をとゞ〜ひの来老の涙よる時こもていろく海むとるまろひ迄

故讀書勿倦
學文勿怠時
倦とハ心労れ疲屈する
事なり解怠のありさま
さ教をなまくれども
勤るこゝろ深くして
人まて一生を強さハ恥
かしゝ況ンなんぢや猶
ゆゝ失の下に書を

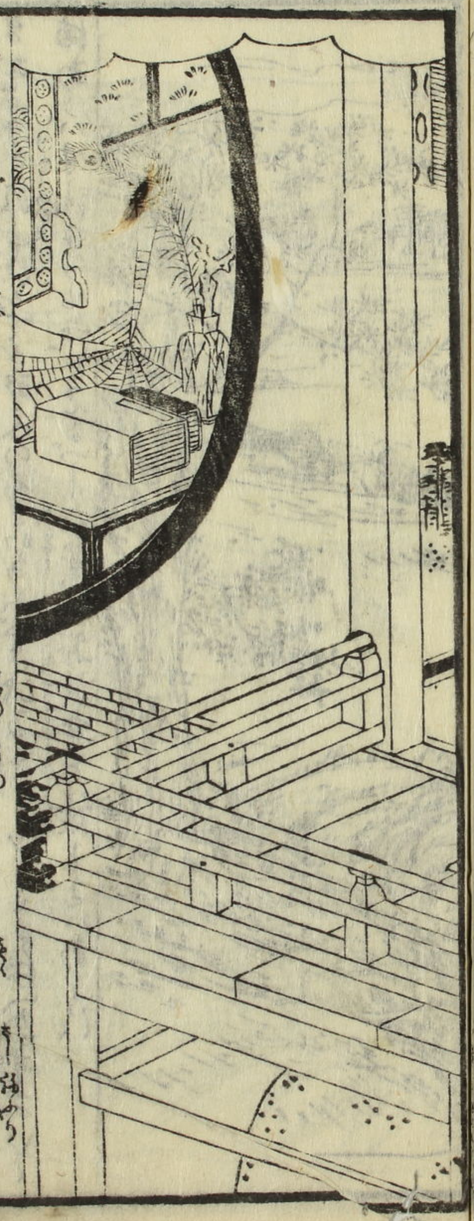
ひろげて天ぬ世ろ人
を友とするわざなり
さのハなしと加人を
いとり去るに倦てよむ
こゝろざるハ何の故
ぞや其ハ学ぶ人く後もぐ
らびおちゝと大きも解せざ
ふよりおこるなりよくすく
よく解せば誰ろ学を讀
て倦このあゝん氏加こ幼稚
よりつゝめまるのびた人く
倦ろなくんして
一生の專勢



楠正成は後醍醐天
皇に御方に参り和歌
大歌を七〻そる氏の張
弓にあてゝ豆状弦器
を帷幕の中にめぐらし
指こゝろと千里の外に
寝ぬ眠るいとまなく
あれこれしきりあれど
勝ちまするすゝ敵
下に書をよゝ幕中
の士卒をあつめて聖



賢のありがたき教を
説きて一日も怠り
給はずふるまれ
ばこそ教ふ孫に
及ぶ楠家三代の
忠義ぶり
右は流れを汲む
ざん
作人うを
感せ
ざん



陳眠通夜誦
忍飢終日習

もろこしの八計をふくみ服を制眠をさまたげんをしのびて日夜ふかくまを読し人とかの国を枕として孔子の教のうるおひ目のさめる時を待て人もあり今古来稀なる七十余の齢なれども書に耽て明日を忘れ

に孔子の教をすぢに十年八消失るん孤と思ひ花園に月日を色

の中にいくさくそやおそるべし

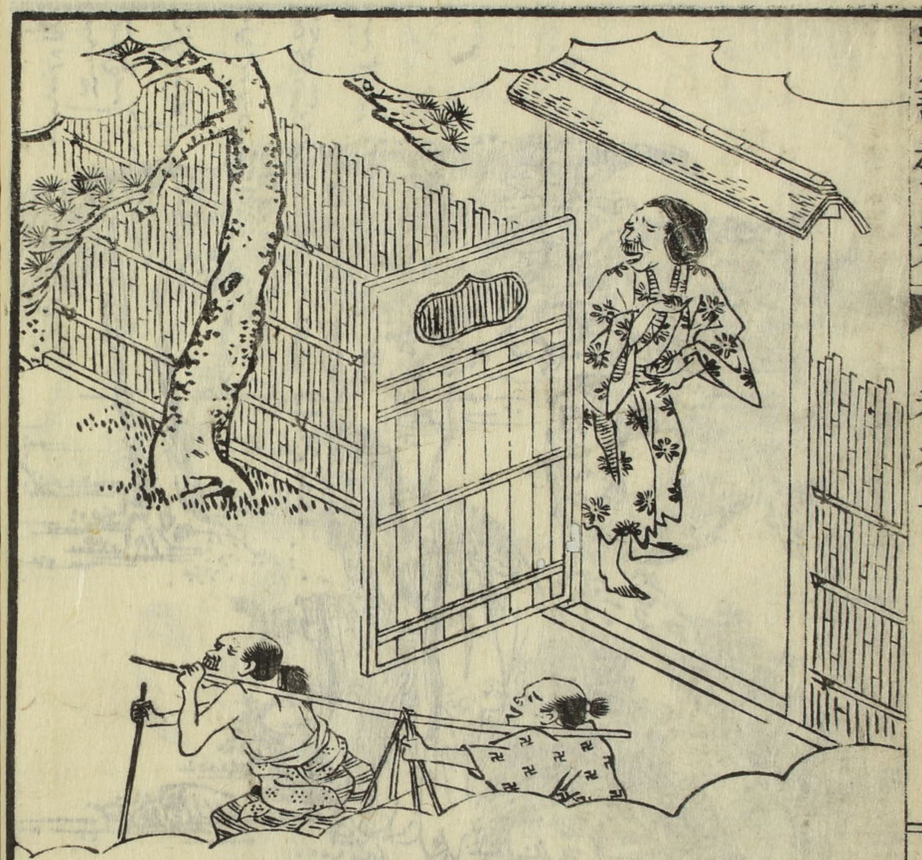
是ハ聖賢の教をのこしおかる寶なれバ男女ともに讀ずんばある可らず然れども
こゝにひとつの心得あるべし聖人も行餘力ある時ハ以て文を学ぶべしとのたまひ學を
學問するとも本を先とし論のごとくにふけり何事も慮外なくびいきになりて己が
國の朴實なる國のおしえ親よりゆづりあたへる家業を早俗なりといやしみ
終にハ持てる家の能業居所なく人の有となりしうけの狭きありける人
まゝあり是等ハ道を取り違ひ翁汁のとにふけるがゆへなりこれより以て愚
人をおもふまで身を修るを以て本とし聖人の道ハ親のゆづりし家業を失ひ
身をおさむる法ていづれ賢人の心をかなふべき此事をよくよく思ひ家業のいとま
有あらバすべて學文をもして身をたつべし家業を捨身を讀ときハあしけれ

雖舍師不學徒如向市人

語るとも
長者を
西と
いとやまつ
入て乃の奥
義を学さる
ハおのれがゐに
元亟の死を徒
市中を往来する
不学不徒の人
むふふ
こゝろ

通と号ずくするものハ等閑ていのあべくに漢の張良ありしと紀柱橋のもとく異人と渭一と
こゝびを曾とさげこ
ゝびを往くをこやぐ
べいよ
をつくくついふ
劉邦と扶くを楚
をほろぼし韓国
うるにあざと
報ず師う
就くあと
まるのばいこと
切うおもひ

とこゝ
作時
いへゝ
るをさう
になにこ
ゝをん



羽を読
不レ役
只如レ計
盗賊

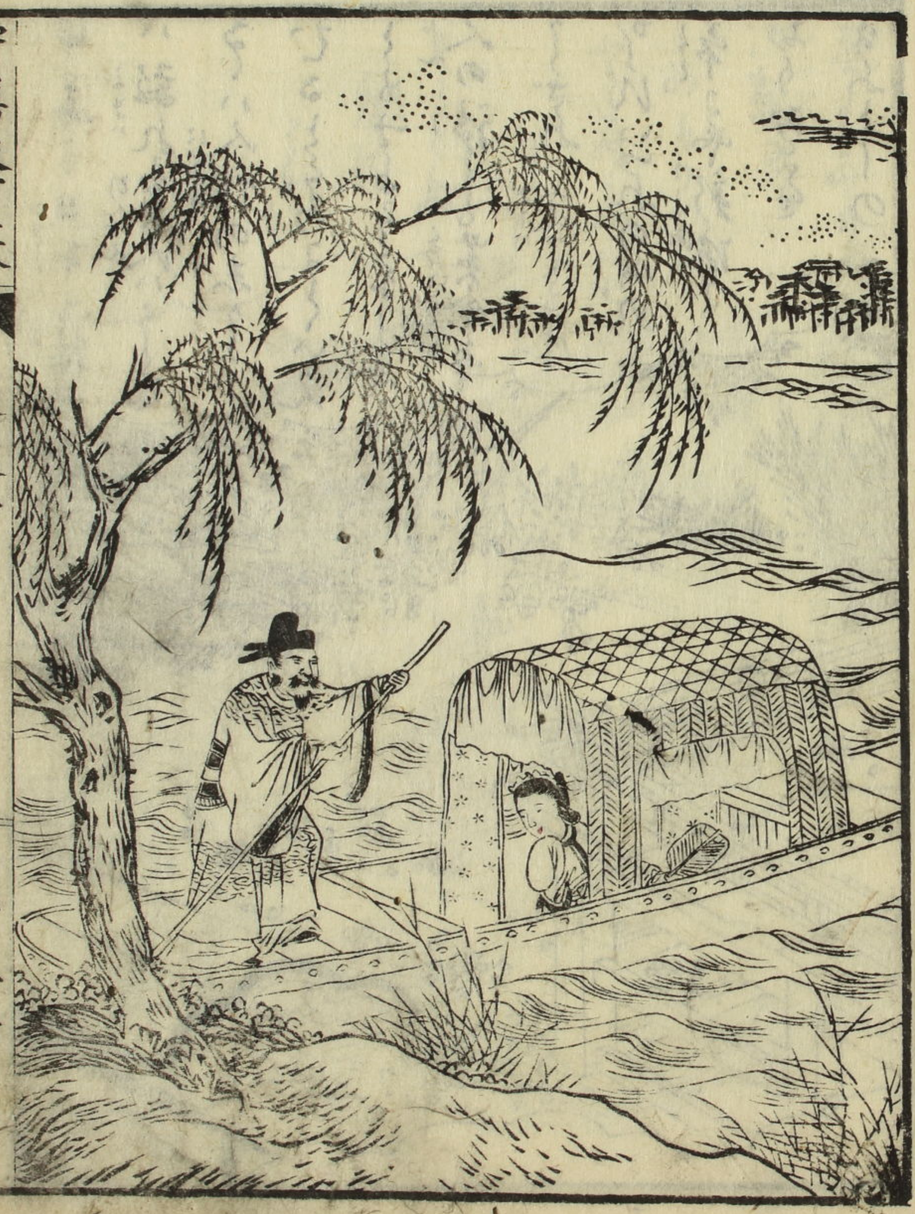
羽を読ばとゞまるなり
何の用もなぬなり
乃ち盗賊一人を読ば
外く多くもかゝり
乃ち知る人はいつ是を
是よりも故の人を
めに学をよく今の
学者を人のため
にすべきなり

えろけざろり益
にしへべくえて
さしばの新要に
あくしざる八平
の重衡の乳母
ご浪義兵衛
盛長ごうと人の
虜となをと捧て
ゆげくるし風
呂の漏を聴づ
けふ出くるく老

人の夜女を
しくるるぐ
くるくるあ
紙衣を
かぐる
ちと
あ
くるぐ

天子老智者
小人愛福人

乃あきらかふ徳ある君子ハ智ある者をも
らんして友とする事を愛する小人ハ富有の人
を愛ハ坊言金を惜して冥を求む
のこゝ〳〵或の曰く智恵ありて金も多く持ゝ人ハ友とするた
ゆへんとゝ〳〵をきゝて思恵のくの風俗なるハいとゝのつまおろ〳〵

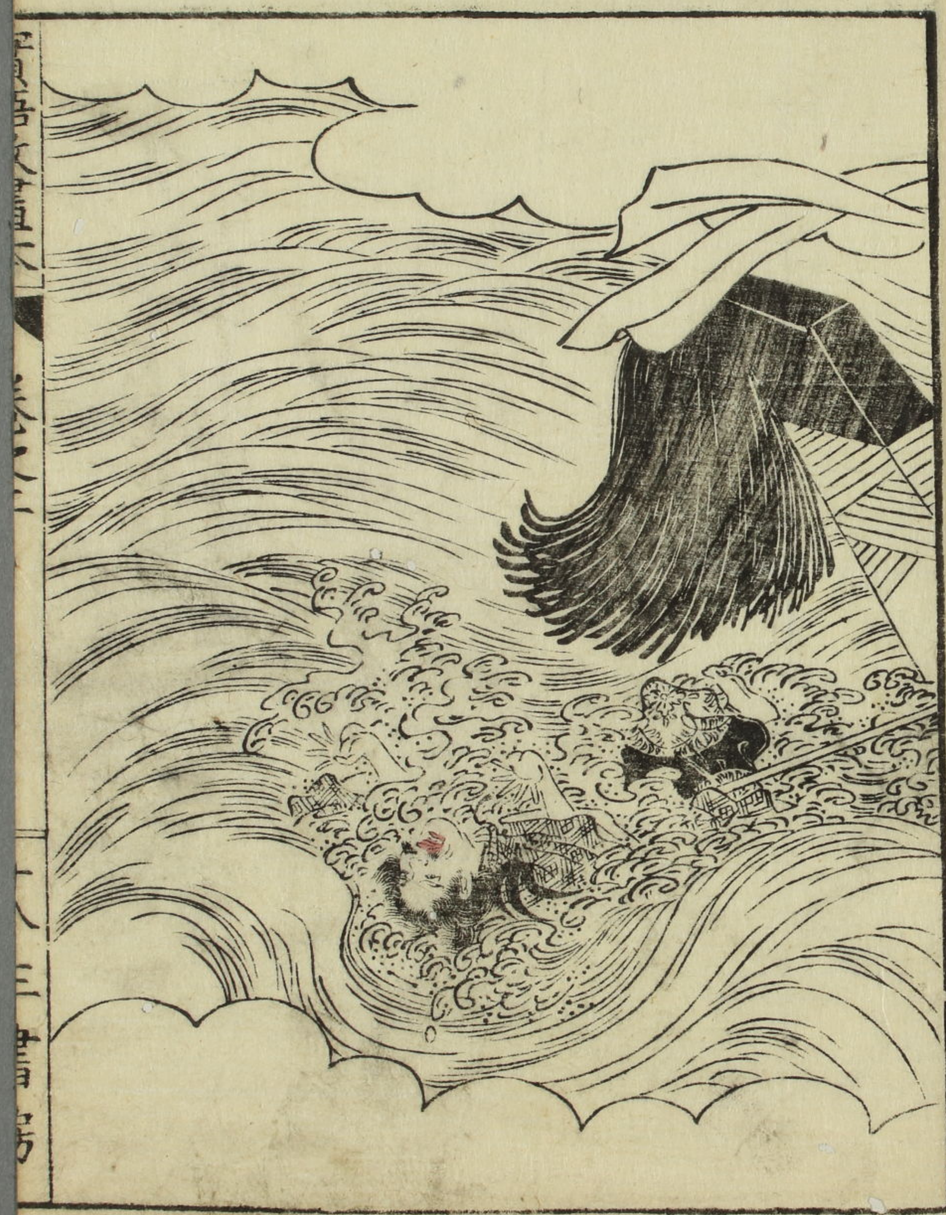


中華も日本も福者
ハ敬れ賢人いらゝ
るハ人情の志ゝ
むるところまくいえ
ともするゝゝ
人の詩も美金ゑ
ゝざれば文も厚
かゝびいづれの時の
幸ゝゝ彩流さ
ちりぬるせ
まふゝの

まゝよませまふ
汗襟さ
このゝりれ
ゆゝれゝつ
ゝゝて
ゝゝゝぬ
風に
ゝゝぞ
数しく

雖入富貴家
為無財人者
猶如霜下花

たとへ富貴の家にうまれたりとも才智なく
おろかの人は智のうちに親の財産をも乱し
分代を浮さんこと恰も牡丹の花の霜に
あひたるごとくなる間に消失んとのこころなり
代まで下代の財を財の宝は材のあやまり
なるべし。法の言の玉智人に対てうるべし



豊盛の賢材あるべいうでう父の家をあるべきさま　不幸短命にして世をもやくさりあい全家盛が為をあるべくそのあとをたるべくんばちち源氏の博ようまり

一門らるべくべ西海うり滅亡しぬ是材あるべきの人い冨貴の家に入とりべくども事あれ

まるまるかるべくべきこと

寛詰教点本巻之弐終